

## 21回目の健康フェスティバルの首尾

渡島医師会  
小笠原内科消化器科クリニック

### 小笠原 実

町民の健康への意識づけを目的に始めた「健康フェスティバル」は、毎年9月上旬に町内の医歯会（現在は三師会）、消防署、行政の3位一体の実行委員会の主催で20年間も続いて開催されているので、すっかり町の年中行事になっている。

例年、健康に関するイベントテーマを決め、それに合った講演会をメイン企画として行っている。ここ10年間のうち6回は“がん”を扱ったタイトルがつけられ、昨年は、『がんに向き合う～がんに負けないで「笑い」と「食」と「運動」と～』であった。タレントでキャスターとしても活躍している麻木久仁子さんが東京から福島町まで来られ、がん患者の立場から自らのがんを克服した話をしてくれた。地元の陸上養殖アワビを使った献立や、千軒そばの振る舞いもあって、おおいに盛り上がった。

ところが今年は、新型コロナ感染予防のため“3密”回避が叫ばれ、どこでも集会中止が続いている。当然、6月のフェスティバル実行委員会でも、開催そのものができるか否かの議論がなされた。健康広場（医師・歯科医師・薬剤師・栄養士・看護師による）、食育コーナー、読み聞かせコーナー、健康ウォーキングなど毎年人気のある企画だが中止と判断された。目玉企画となる講演会は、ソーシャルディスタンスを守った座席を用意すれば可能ではないか、子供たちが競っていつも素晴らしい作品を発表してくれる小中高生の「けんこう標語」の募集は実施できるのではないか、と話し合われた。

結局、フェスティバルは今年も実施するが、講演会と健康標語の2企画を行うことで決着した。講演内容は、今まさに危機に見舞われている「新型コロナウイルス感染」が最適だと決まった。新聞、TV、インターネット等から夥しい情報が発信されているが、この講演会を機に情報を整理し、新型コロナについての正しい知識を学び、感染予防と今後の心構え（正しく怖がる）に結びつけてくれればということで、『コロナに負けない～正しい知識で感染をふせごう～』を、第21回のテーマに決定した。

講師は、当町に縁のある札幌医科大学の教授を介して、同大の微生物学講座の横田伸一教授に依頼することになった。電話の向こうの先生は、リモート講演会を考えていると話す見ず知らずの私の提案を快諾してくれた。その後、町の福祉課の担当者によってリモート講演の予行練習が行われ、町内の会場と大学の回線が無事つながり本番を待つだけという

報告を受け、ホッとした。

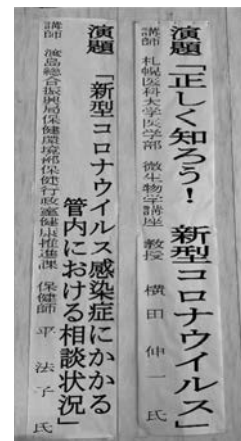
一方、今年の町内の学校の夏休みは、8月1日からと決まったので、健康標語の募集締め切りは7月末とした。例年通り全学年の生徒から作品が届いた。選考は8月第3週までに済み、小・中学生は各々10作品、高校生は5作品の入選作が決まり、こちらも当日を待つばかりとなった。

9月5日（土）のフェスティバル開催当日は晴天で、気温がかなり高かった。会場受付では、マスク着用で来場した参加者に体温測定カメラでの検温が行われた。受付の横に、手洗い体験コーナーが設けられ、先着35名が手洗いチェック機器で自分の手洗いの確認を行なった。しっかり洗ったつもりでも、爪や指の間、親指、手首に残しが目立つ人が多かった。

開会式の後、健康標語の入選者の表彰式が行われ、次いで渡島総合振興局の保健師平さんの渡島管内の感染相談状況の説明があり、それから横田先生のリモート講演が始まった（写真）。内容は、①正しく知ろう！新型コロナウイルス②北海道における感染の現状③感染蔓延期における感染対策——の3つのパートに分けて話された。スライド枚数は48枚と多かったが、流れるような話しぶりに引き込まれ、短い時間に感じた。一般市民の皆様へ守ってほしい“4箇条”のスライド中の、「感染の基本は唾液エチケットと手指衛生」と「感染者に対する偏見、排除、差別がないように」という2箇条が印象に残った。さらに、新型コロナは「静かでしたかな」「人・社会を分断する」ウイルスだという最後のスライドに驚倒した。今年の冬期間は、インフルエンザの流行と重なると思うので、感染対策と診療体制は例年より強化しなければならない。

会場には、子供から高齢者まで幅広い年齢層が参加していた。質問コーナーでは5人から質問があり、横田先生はどれも分かりやすく答えていたが、「新型コロナウイルスはどこからきたのですか？」という小学3年生の質問者にも優しく話しかけていた。

新しいことにチャレンジした今年のイベントだったが、実行委員長としては、迷いはあったが開催して良かったと、今は満足している。



2氏の演題